慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	すべてはハートで決まる
Sub Title	
Author	山本, 耀司(Yamamoto, Yoji)
Publisher	慶應義塾大学理工学部
Publication year	2008
Jtitle	人間教育講座 : 社会を知る自分を知る自分を育てる (2008.) ,p.7- 30
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO50001001-20080000-0007

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

すべてはハートで決まる

ファッションデザイナー

山本　耀司

やまもと・ようじ　東京生れ。慶應義塾大学法学部、文化服装学院卒業。一九六九年「装苑賞」「遠藤賞」を受賞。一九七二年ワイズ設立。一九八一年に発表したパリコレクションで一大旋風を巻き起こし、続く若いデザイナー達に多大な影響を与える。二〇〇二年にはアディダスとの共同ブランドY―3のクリエイティブディレクターに就任、ファッションとスポーツという二つの世界を融合し、革新的なスタイルを打ち出す。また、一九八九年ヴィム・ヴェンダースによるドキュメント映画「都市とモードのビデオノート」発表のほか、ワーグナーのオペラ、ピナ・バウシュ舞踊団、北野武監督映画などの衣装制作も手がける。「TALKING TO MYSELF」(02)、「A MAGAZINE」(04)など関連刊行物多数。一九九四年フランス芸術勲章「シュヴァリエ」受章、二〇〇五年フランス国家功労勲章「オフィシエ」受章。

はじめに

こんにちは。

先週、年甲斐もなく十日間で四回も空手の稽古をしたため、月曜日から過呼吸になってしまいましたので（笑）、ちょっと声が出ておりません。いつもはもっといい声なのです。また、講演中に倒れるかもしれません（笑）。それはそれでなにかのご縁だったということでお許しください（笑）。

今回、「社会のなかでどう生きるか」という大きな講演テーマをいただきましたが、テーマが大きすぎる。大きすぎて、どんなお話をしてもいいわけです。要するに選択の幅が広すぎる。困ったなと思いながら、車の中で考えました。そして、自分の専門であるファッションの領域を中心に、自分が体験してきたことから、今後の日本、あるいは世界のためにみんなに拾い出してもらいたいポイントをお話するしかないなと思い、ざっとまとめてまいりました。

質疑応答の時間がたくさんありますので、どんな質問でもかまいません、質問してください。また、年齢差に関係なく、お互いを「〇〇君」と呼ぶのが慶應の伝統ですので、どうぞ「山本君」と呼んで質問してほしいと思います。

講演のポイントは四つにまとめました。①パターンナー、パターンメーカーという専門職としての特性について、②人間の「手」が必要な産業という意味でのマニュアル産業について、③科学と芸術について、④フランス人の人権主義について――以上の四つに簡単にふれて、質疑応答にうつりたいと思います。

1　パターンメーカー

パターンメイキングには、大きく分けて二種類あります、立体裁断と平面裁断です。ヨーロッパの人たちは、ボディスタンド（人台）にいきなり布地をボディスタンドの上にのせてピンをうちながら形をつくっていく、立体裁断という方法をとっています。日本では、「洋裁」とよばれた時期に、今ではほとんどが九十歳以上になっていらっしゃる先生たちがヨーロッパで学んで帰っていらっしゃった。ところが欧米型の立体裁断では時間がかかりすぎるので、原型をつくる平面裁断を編み出したわけです。平面裁断とは、人間の服をつくるためにはおおよそこのくらいの標準サイズの布を型紙として用意しておいて、その原型からいろいろなアレンジをしていくという手法です。

平面裁断のほうが三倍ぐらい速くできます。そのおかげで、イタリアやフランスで活躍しているデザイナーのアシスタントでパターンメイキングしている日本人は非常に多い。なぜなら平面裁断ができるから。スピードが速い、仕事が速いから。

ここでみなさんに申し上げたいポイントはなにかというと、われわれは次のショーに向かってフィッティング（仮縫い）をします。モデルさんをよんで、試作したプロトタイプを着てもらうのですが、パターンメーカーがつくったものを着たモデルさんが着替え室から出てきた瞬間にいつも感じることがあるんです。試着した服を見た瞬間に、モデルさんが今着た服をつくったパターンメーカーがどんな精神状態なのか、どんな暮らしをしているのか、どんなボーイフレンドがいるのか、あるいは家庭がどんな状況なのか、そんなことまでもが一度にわかるんですね。

いつも会社の現場で言っているのは「服はウソをつかない」ということです。「口ではいくらでもウソをつけるけれど、つくるものはウソをつけない。つくるものには、今の君の現状が全部出てしまうからね」。僕はこう言っています。今後のみなさんのひとつの判断基準としてほしいのですが、誰かの言葉よりも、その人がつくったものや書いたもののほうにその人の本性が出ています。そのことをなにかの機会に体験してもらったら、今僕が言った意味がわかるだろうと思います。

最近、アトリエで働いている社員たちと世代がかなり離れてしまいました。自分の子どもの世代の子たちが働いているので、仲間意識や連帯感が共有できなくなりはじめていて、彼らに対してあまり激しい言葉は使わないようにしています。会社を創業した頃に一緒に働いていたのは世代が近い人たちばかりだったので、パターンナーをよく叱りました。パターンナーがヘンな服を出してきたときには「おまえ、だいたい顔が悪いから、そんなものをつくるんだよ」と言ったりしました（笑）。今だったら、パワーハラスメントで訴えられますね。ありとあらゆる悪口雑言で、ぺちゃんこになるまでいじめぬきました。要するに鍛えたわけです。

僕がなにを言いたいかというと、みなさんは大学、それもいわゆる今の日本では東大よりもあこがれの的になっている超一流の大学に受かって、ここにいるわけです。つまり完全なるエリートだし、エリートとしてこれからがんばっていってもらわないと困る。だからこそ言うのですが、頭だけではダメです。ノウハウや知性だけではダメ。ハートがなければいけないと思います。

そのためには犬の訓練と一緒で、何度も同じことを繰り返す訓練が必要です。体育系の人たちがやっているように、繰り返して訓練することで、からだが覚えていきます。

美系も体育系と同じで、美大では、たとえば有名な人がつくったギリシャ彫刻の石像を木炭でうつしますが、これはその胸像を写真のように手で描けるように訓練しているわけです。極論すると、目で見たら腕が動くという訓練を何十回も何百回も繰り返します。それによって、基本的なデッサン力が身につきます。デッサン力は、ものを想像するときにどんな分野でも必要とされる力で、繰り返しの鍛錬によって身につくものです。これだけは大学では覚えられません。大学の授業の中にはこうした内容のものはないでしょう？　これが、一流大学で唯一欠如しているところです。

みなさん、ＭＢＡって知っていますか？　たとえばマサチューセッツ工科大学に留学して、ＭＢＡを取得したいと考えている人がいたら、手を挙げてください（誰もいない）。パリのソルボンヌ大学でＭＢＡを取得したいと思っている人は？（誰もいない）いないか……。ＭＢＡとはMaster of Business Administration（経営学修士号）で、会社の経営の監査をできる修士号です。ＭＢＡをもっていると就職にとても有利で、日本で言うならキャリアでしょうか。ＭＢＡは、これまでとても重要視されていました。しかし、これからはちがいます。今、アメリカでもっていると就職率が高まるとされているのはＭＢＡではなく、ＭＦＡ＝Master of Fine Arts（芸術学修士）です。純粋芸術を勉強した修士です。たとえばアメリカのジェネラルモータースなどでもそうですが、これからは、経営がなんであるか、経営監査がどういうものであるかを知っているMBA の取得者よりも、ファインアートをよく勉強しているＭＦＡ取得者のほうが会社の役に立つと考えています。これは最近のことではなく、六、七年前からの傾向です。これを頭に入れておいてください。

要するに、これからの時代ではほとんどのものがもうすでに試され、つくられてしまった。ないもの

はないというほど、ほとんどのものがあるわけです。ですから、これからは付加価値の時代です。つまりデザイン力がビジネスを左右する時代に突入しているんですね。無形の価値を争う時代で、これは世界の偉い人たちは誰もがすでに気づいていることです。

2　マニュアル産業

実はファッション産業は、僕に言わせると、農業に次ぐ、人類最後のマニュアル産業です。手作業を必要とする段階がとても多い。人間の手というものは文化です。どういう訓練を積んだ、どういう人が、布のどういうところをさわるかによって、できあがるものがまったく変わってくるんですね。

極論ですが、日本がこれから大事にすべきなのは付加価値をもった、そして無形のマニュアル産業である農業だろうと、僕は最近思っています。たとえば中国や韓国の産業力は日本にかなり肉薄してきています。中国は、これまで安い労働力の大生産国でしたが、今や同時に大消費国になりつつあり、その対象は自動車や電化製品だけに限らず、ファッションでも同様です。ファッションでも大消費国になる可能性を秘めている。ですから世界中のファッションブランドが広い中国のいろいろなところに出店していて、中国はすでに安い労働力だけを求めていく場所ではなくなっています。

ファッション産業だけでいうと、たとえば「川上産業※」である紡績や織物産業、繊維産業は、ファッションに限っていえば、今やそのほとんどが日本からはなくなってしまいました。本当に特殊な技術をもっている中小企業だけが、二十年前に比較して四割ぐらい残っていて、これはおそらく生き続けるで

しょう。

私の会社は、二年前に経済産業省に呼ばれて表彰されました。なにを表彰してくれるのかなと思ったら、繊維を海外に輸出した中小企業のナンバーワンとしての表彰でした。たいした額ではないんですよ。百億円もいかない。トヨタなんかに比べたら、ほこりみたいなもんです（笑）。今の日本のファッション界はそんな規模です。「メイド・イン・ジャパン」はいつまで続くだろうと考えると、とても切なくなる時期に来ています。

※業界をひとつの川にたとえて、紡績や織物産業は川上産業、マーケティングや小売業などは川下産業と呼ぶ。ファッションメーカーはその半ばに位置する。

3　科学と芸術について

急にテーマが飛躍するようですが、話はつながっています。

僕は、東京工業大学の学長をなさっていた、航空力学の権威の斎藤先生と親しくさせていただいていました。お酒やお食事をご一緒することもあって、ある日突然、「山本君、科学的ってことはどういうことだと思う?」と質問されました。僕は「う～ん、理論的ってことですか」と答えたのですが、「いや、ちがいます」と言われた。それ以上はわからないので、「いや、わかりません」とお答えしたら、先生は「科学的という意味は、なにかの物質が以前起こったことと同じ状態を再現してみせられることです」とおっ

しゃいました。「宇宙で起きている現象のなかで、科学者が再現してみせられることは非常に少ないんです。だから科学を、とくに物理学を極めると、最終的にはどうしても芸術の流域、神の領域に入って来てしまうんですよ」。そうおっしゃいました。僕は「ああ、なるほど」と思いました。

たまたま坂本龍一さんと話をしているときに、彼に「あのさ、時々降りてこない？」と聞いてみました。そしたら、「うん。降りてくるんだよね。『戦場のメリークリスマス』は降りてきたんだよ」という答えが返ってきた。そう、降りてくるんです。一生懸命やっていると、一生懸命につくっていると、ふっと降りてくる。そのときには、「あ、これは神様がくれたギフトだ」って思うんです。

これって、斎藤先生がおっしゃった「科学的」と一緒ですよね。科学も芸術も本当につきつめるとそこに行くんだなという感覚を持っております。

4　フランス人の人権主義について

慶應義塾大学の開校の趣旨として、「気品の泉源、智徳の模範を目指す学塾として、全社会の先導者育成を……」とあり、ここには「気品」や「智徳」といった言葉が出てきています。これを読んで、ちょっとフランス人の話をしなくてはいけないと思って、このテーマをもってきました。

フランスは、地球上で一番早く人権宣言をした国です。十八世紀ですよ。十八世紀に、自由・平等・博愛をうたった人権宣言をした。十八世紀の頃から、人間がもって生まれた権利を自覚して、個人の尊厳を非常に大事にしている国なんです。あまり大事にされすぎて、「フランス人ってちょっととつつき

悪いなあ」「えらそうだなあ」と感じることはよくあります。個人がそれだけ大事にされているために、人権主義的になりやすいので、彼らは日常生活である簡単なルールを守っているんですね。

たとえば同じアパートに住んでいたら、朝会ったら“Bonjour!”（おはよう）って言い合う。パリで地下鉄に乗ると、ドアは自動では開いてくれません。“Vous allez descendez ?”（あなた、お降りになりますか？）と聞いて、ドアを開けるんです。エレベーターでかちあったときには“Après vous.”（お先に）と言います。

そういう小さな礼儀を、ひとつひとつの細かい場面で交換し合っていかないと、人権主義のためにみんなが身勝手になってしまって、すごく不愉快な国になってしまう。だからそういうふうに努力しているような気がしてなりません。僕はフランスではよそ者なので、そういうことがすごく気になります。

日本に帰ると、エレベーターに乗ろうとすると、割り込み女が結構たくさんいます。若い女性で「お先にどうぞ」って譲ってくれる人はいなくて、そう言ってくれるのは若い男性だったりします。あ、僕は女の人のほうが好きですからね（笑）。ただし、確率からすると、統計からすると、若い男性のほうが礼儀正しいです。若い女性の礼儀正しさはどこに行ってしまったんだろう。これは僕の身の回りだけかもしれません。この学校ではそんなことはきっとないよね？（笑）

気品や気高さ、潔さ、恥を知る心について話し始めたら、「これから一緒に飲みに行こうぜ」というくらい長くなってしまうので、これ以上はもう話しません。非常に深くて広いので、お話が続けられませんが、以上四つのテーマをみなさんにぶつけました。このテーマでも、それ以外のことでも、どんなことでもかまわないので、どんどん質問を寄せてください。

質疑応答

Q1　学生A（理工学部四年生）　山本さんは慶應を卒業してから、専門学校に入学なさいました。慶應を出た時点ですでに二十二歳。さらに三年間学校に行くとなると、年もとるし、お金もかかって、たいへんなことだと思うのですが、この選択に不安を感じたことはありますか？

A　僕は大学三年のときに、大学卒業後に就職をしないことに決めました。僕の友人たちはすごくいいヤツばかりでしたが、ほとんどが幼稚舎から上がってきていたんですね。悪ずれしていなくて、友人としてはとても心地よかったけれど、彼らの実家は有名な企業や商店で、その二代目だったり、三代目だったりで、つまりはお金持ちのお坊ちゃんなんです。「こいつらと普通に就職して競争したって勝ち目はないな」と思って、大学三年、みんながちょうど就職活動をしているときに、リュックサックひとつでヨーロッパ一周しちゃいました。今で言うバックパッカー、昔のヒッピーですね。

帰ってきてから、新宿・歌舞伎町に洋装店を開いていた母親に「すみません。お店を手伝わせてください」と頼んだら、すごく怒られました。「洋裁をバカにしないで。お針子さんにバカにされないように、文化服装学院ぐらい行ってきなさい！」と。「しめた！」と思いましたね（笑）。「また学生ができる！」って。それで三年間行きました。以上です。

Q2　学生B（理工学部一年生）　ファッションという新しい方向に向かおうとしたときに、人との出会いに求めるものもあったのではないかと思います。山本さんはどういうふうにファッションの世界で

人とのつながりを持とうとしたのでしょうか。

A　就職しないで、母親におどかされて文化服装学院に行ったときには、僕はファッションデザインという職業があることも知りませんでした。ただひたすら「洋装店を手伝う」つもりでした。学校に行ったら、悪い先輩がいて、「ファッションデザイナーという職業があって、これが儲かるんだよ～」とそそのかされたんです（笑）。たとえば、コンクールに出品して三等に入ると賞金がもらえる、といったことを教えてもらって、賞金ほしさにがんばりました（笑）。

Q3　学生C（経済学部一年生）　僕はファッション関係の雑誌の記者になりたいと思っています。「山本君」のような著名なデザイナーにとって、ファッション雑誌とはどういうものですか？

A　クリエーターとエディター、あるいは批評家は共犯関係にあります。これが正しい関係で、一緒にその分野を育てていくんです。ところが今のメディア、とくに雑誌のほとんどは、大きなメジャーブランドに買われてしまっていて、自由な取材もできないというのが実情です。だから、今の時代、ファッションのエディター、あるいは雑誌の編集者になりたいというなら、一度その状況を勉強してください。かなり難しいです。

Q4　学生D（経済学部三年生）　山本さんは素晴らしいコレクションを毎年開催なさっていますが、服をデザインするときにどこからインスピレーションを得るのでしょうか。

A　トイレにいるときや、今みたいに若い人に会っているとき、本を読んでいるときなど、すべての瞬

間です。生きている限り考えています。特別なときはありません。

Q5　学生E（経済学部四年生）　今の時代には無形の価値や付加価値をつくることが重要だというお話がありましたが、その目的のために、われわれが意識をしておいたほうがいいこと、あるいは山本さん自身が普段気をつけていることはありますか？

A　話がちょっとはずれるかもしれないけれど、意味あいは同じです。

世界を理解する人のなかには、バックパッカーとして世界中を自分の足で旅行して、いろいろな人種と話をしたりして理解する人と、山奥にこもって、座禅を組んだり、畑を耕したりして理解する人の二タイプがいると思うんです。後者を僕は「坊主」と呼んでいまして、僕はこの「坊主」が大嫌いです。若いうちには、できるだけいろいろないいものを見て、いろいろな人と接して、「世の中にはこんなにおもしろい人もいるんだ」「こんなに悲しい人種もいるんだ」「こんなにひどい場所もあるんだ」など、たくさん自分のなかにためてください。狭い島国である日本でぼーっとしていたらダメです！

Q6　学生F（文学部三年生）　耀司さんのデザインを雑誌などで見ると、細い女性のからだに大きなシルエットの服というパターンが続いているようですが、その魅力と発想の源を教えてください。

A　非常に高度なファッションの美学に対する質問だったので、長くならないようにお答えします。

最近、渋谷などでは醜いものを露出して歩いている女性が多いでしょう？（笑）　ああいうファッションは周囲に対して失礼だと思います。僕は「隠せ」と思います。隠したほうがいい。隠されると、イ

マジネーションがかきたてられて、「こんなにステキなからだが入っているんだろう」と思うから（笑）。そういう発想です。

Q7　学生G（大学院哲学専攻）　手づくりのものには職人の業が出ていると言いますが、考えてみると、どんなに安い服でもお針子さんの手にかかっているし、大量生産されているものでも人の手にかかっています。それについて僕は感動しないのですが、山本さんにとって手づくりのもつ味わいとはどんなものなのでしょうか。

A　先ほど人間の手は文化だと言いました。僕のデザインしたものを、同じ型紙と同じ生地を使って服をつくるとします。しかし、フランスの工場で縫ってもらったものと、日本で縫ったものでは、まったく表情がちがうんです。それぐらい人の手というものは香りがちがう。そういう意味で、人の手は文化だと言いました。たとえ大量生産するものでも、たとえば中国の人の手が使われていれば中国の香りがします。今、中国の労働力は高くなりはじめており、中国も輸出国になるのではないかと言われているため、ファッションメーカーはさらに安い労働力を求めてインドネシアやベトナム、スペインに進出しています。僕は個人的な理由でベトナム人が好きなのですが、ベトナム人のつくるものはおそらく繊細なのではないかと思います。

Q8　学生H（文学部一年生）　今、中国ではいろいろなブランドがあって、デザイナーもたくさんいますが、外国のものを真似したものが多いのが実情です。これはひどいことだと思います。私の従姉妹

もファッションデザインの仕事をしていたのですが、「こういうものを真似てつくれ」と指示されることが多くてイヤだと、やめてしまいました。デザインのコピーについて、山本さんはどう思われますか？

A　ものづくりは、あるいは一種の表現活動の入り口は、コピーです。コピーして、コピーして、コピーし尽くせというところから始まるのです。コピーし尽くした先に初めて発見があり、その発見こそ己のものです。だから、若い頃はコピーすることを恥じることはありません。

中国で、僕が感じるのは、中国を制覇した漢民族の美学がもし世界を制覇するとしたら、ちょっとやばいね。そう思いませんか？　日光の東照宮のような極彩色で、真っ赤な柱に金銀が使ってあるような、あの感覚では世界を制覇できないと思います。

Q9　学生I（理工学部四年生）　くだらない質問かもしれませんが、僕はファッションに興味があって、服をよく買いに行きます。でも、街で見かける「あの人のファッションセンスはかっこいいな」「服がよく似合っているな」と思うような人たちのようには、僕はまだ服を着こなせていないと思うんです。山本さんの観点から見た、自分に合う服の着こなし方や服の選び方があれば、ぜひ参考にしたいので、お教えください。

A　僕から見ると、今の日本の若者ファッションは、男女ともに、頭のてっぺんから足の爪の先までプロにいじられて画一化していると思います。そうじゃないですか？　ヘアサロンに行って、ヘアスタイルをこうしたほうがいいよとアドバイスされたり、黒い髪をわざわざいろいろな色に染めてみたり、爪の先まできれいにしてもらって、そのうえ着るものについても、「あの人、かっこいいな」「あの人みた

いに着こなしたいな」という気分のほうが多いのではないかなと心配しています。

だから、今おっしゃったこととは逆で、僕はこう言いたい。「君はかっこいいよ！　ちょっとダサイぐらいのほうが男はかっこいいんだよ！」（笑）

Q10　学生J（文学部一年生）　山本さんは新しいジャンルを切り開いてきた方だと思います。私は、最近の若者や社会はだんだんと保守化してきている、守りに入っていると思っているのですが、山本さんはそう思われたことがありますか？

A　おっしゃったように、出る釘は打たれるので、みんなとちがった格好をすると、あいつはダサイとかおかしいとか言われます。若いときには必ず言われる。これはしょうがない。だから僕はひとつだけもってほしいと思っているのは「疑問」です。「これでいいのかなあ」という疑問だけは持ち続けてほしいと思っています。

Q11　学生K（経済学部二年生）　将来はアパレル関係でバイヤーやMD（マーチャンダイザー）になりたいのですが、こうした仕事では流行を見極めたり、先取りしたりする力以外に、どんな能力が必要とされるのでしょうか？

A　今、日本の都会と言われている街の目抜き通りを見ると、イタリアかフランスの大ブランドに占領されていることはわかっていますよね？　そのなかでバイヤーとして働こうと思ったら、まず外国語力が必要です。英語、フランス語、イタリア語のうち、最低でもひとつはできないと、できません。ファッショ

ン界はグローバル化なんてものではなく、フランス人もイタリア人も、イギリス人もみんなひとつになってしまっているので、日本語以外の言葉を最低一カ国語はしゃべれないとできません。そして、その言葉を使って勉強できることがたくさんあると思います。

Q12　学生L（経済学部一年生）　山本さんはパリでコレクションを発表されていますが、パリで日本人として意識していることはありますか？

A　日本人として意識していることとして、それほど強いものはありませんが、日本人としてということでなくて、デザイナーとして意識していることはありますね。パリでもミラノでもコレクションの九割は、アクセサリーや靴、ジュエリーを売るためのプロモーションになってしまっていて、服だけで真剣に勝負しているデザイナーは五本の指で数えられるぐらいしかいません。それが残念です。たとえば、僕は、ファッション通信のBSなど映像で放送されるファッションショーに登場する奇妙な服たちを見て、「本当に日本人はこれを美しいと思わされたらたいへんだなあ」と言っています。そういう意味で、真剣に服と勝負しているデザイナーが減っていることを危惧しています。

Q13　学生M（法学部二年生）　東京ファッションショーは正直に言ってぱっとしません。パリコレクションやミラノコレクションに比べて求心性が弱いというか、大御所のブランドが弱いことが問題だと思っているのですが、耀司さんは、東京に戻ってきてもっと盛り上げることを考えられていますか？

A　やらなきゃだめだよね（笑）。パリでやって、また東京でやるっていうのは、お金がかかるんだよ

……（笑）。でもやらなきゃだめだね。最近まじめに考えています。

Q14　学生N（商学部一年生）　私は服が好きで、ファッションサークルに入っていて、将来はファッションデザイナーの仕事をしたいと思っています。日本のファッションシーンが今節目にさしかかっているとおっしゃっていましたが、今のファッション界に必要なものはなんだと思われますか？

A　ごっつい質問ですね。もう日本にこだわらなくてもいいのではないかと思います。というのは、若いデザイナーのすぐれたものを集めて、自分のコレクションとして上手に展開しているセレクトショップがヨーロッパにたくさんありますが、日本にはありません。日本にあるのは百貨店だけです。そして百貨店は若いデザイナーを育ててはくれません。

たとえば新宿の某百貨店は一万円の服を店で売ると、そのうちの五十五％をもっていきます。手元に残るのは四十五％。不合理です。四十五％から、生地や縫製代など原料代や経費をさしひくと……。その百貨店だけで商売をしていると、おそらく死にます（笑）。

これはひとつの端的な例ですが、日本の百貨店には若いデザイナーを育てる態勢がないんですね。百貨店がダメだから、日本のファッション界は本当にやばいんです。と言って、某百貨店に二年間ほされたことがあるんだ（笑）。

ともかく才能があったら、日本にこだわる必要はなくて、ベルギーでも、パリでも行っちゃえ！と思います。

Q15　学生O（経済学部一年生）　山本さんは文化服装学院にいた頃、賞金目的でコンクールに参加していたということでした。でもお金だけのためでは、仕事を今まで続けてこられなかったと思います。山本さんは今、なんのために仕事をしているのか。そしてその目的が年齢によってどう変わってきたのかを教えてください。

A　先ほども言ったように、僕はファッションデザイナーという仕事があるのを知らなくて、文化服装学院で先輩に教えられました。コンクールでグランプリを取って、そのご褒美としてパリへの飛行機代をもらいました。パリに行ったら、自分が勉強したことがなんの役にも立たないということがよくわかりました。僕はオートクチュールを勉強していたのですが、ちょうどパリではプレタポルテが流行り始めていて、打ちのめされました。これは無理だと思って帰ってきて、ずっと母親の洋装店を手伝っていました。

洋装店というところには、自分ではお金を払わない人、ダンナさんやダンナさんではない人が洋服代を払ってくれる人が注文に来ます。そして「ここ、もうちょっと詰めて」とか言うわけ、それ以上詰まらないウエストを（笑）。そういう人たちを相手に五、六年仕事をしていたら、イヤになって、既製服をつくり出しました。

そこから十年間ぐらい、僕には記憶がありません。小さなメーカーをつくって、朝一番で会社に行って、夜最後まで会社にいた。本当に記憶がないんです。気がついてみたら、パリにいた。

みんな、不思議そうな顔をしているね。人間にはそういうことが起こります。自分が始めたことに夢中になる期間があるんです。

わかりやすく言うと、七十年代の後半から八十年代の後半にかけて流行ったものってまったく知らなくて、たとえばどういう歌が流行っていたかとか、どういうバンドが有名だったかまったく知りません。最近、失われた時間を取り戻そうと思って、『北の国から』や長渕剛を全部揃えてもってこさせました（笑）。

そのくらい空白の十年間です。そういうことも起こることがあります。そして気がついたらデザイナーになっていました。最初からなりたい、なりたいと思って、なったわけではないんですね。

Q16　学生P（早稲田大学三年生） 服やモードなどが好きで、自分でも勉強しているのですが、よけいにわからなくなってしまっています。山本さんが考える「ファッションとはなにか」を教えてください。

A　ファッションというのは、くしゃみみたいじゃない。「っくしょんっ！」（爆笑）

ファッションの意味を辞書で調べたことがある？（質問者「流行ですか？」）流行以外の意味があるんだよ。「流儀」「しかた」「その人なりの方法」というような意味がある。そうすると、わかるでしょう？

これは一般論ではないし、学者が分析した定義でもないけれど、僕が思っているファッションとは、①着ているもので、その人の本性や中身、考え方がわかる、そういうおそろしいもの、②ファッションデザインの仕事や、おしゃれをする行為は、人の目をデコレートすること。自分だけが気分がよくて、人に迷惑をかけるようなファッションが多すぎるから言っているのだけれど、その場の雰囲気を美しくするのがファッションだと思います。

僕は若い頃に「オレの服を着るんだったら覚悟しろよ。生活から人生から変わるからね」とよく言っていました。ちょっと過激だけれど。今は言っていないですよ。というのは「上着一着、パンツ一本買

うだけではすまない。それ以外のもの、生活スタイル全部を変えてもらわないと、似合わないからね」ということです。一着の上着、一本のパンツを選ぶことは、ひとつの人生を選ぶくらいたいへんなんだと、いつも思っていました。

言い方を変えると、今の世界は結構自由で、みんな好きなものを着ているけれど、たとえばこの国が戦時下で、「この服を着ろ！」と着る自由を奪われたらたいへんでしょう？　着る自由があるということは。すばらしいことであると同時に、それだけ重い責任を担っているということを胸において、ファッションを考えてほしいと思います。

Q17　学生Q（文化服装学院）　文化服装学院在学中に、周囲の人のなかでも「自分が才能あるな」「ほかの人がもっていないものをもっているな」と感じたことはありましたか？

A　文化服装学院は、私が入学する直前ぐらいまで、一般からは洋裁を勉強する学校、花嫁修業の学校だと思われていました。だから、今は知らないけれど、当時は田舎から出てきた不細工な女の子ばっかりでした（笑）。当時の学生は一万人いて、そのうち男子は百人。一％です。

で、実はうぬぼれていました。その頃有名だったイヴ・サンローランなどヨーロッパのデザイナーに対しても「こんなもの！　いつか勝ってやる」と思っていました。バカでした（笑）。

Q18　学生R（文化服装学院）　耀司さんの服のイメージというと、やはり「黒」です。耀司さんにとって黒とはどういう色ですか？

A　黒は、昔は喪服に使われた色でしょう？　僕がデザインを始めたときは、できるだけ人の目を汚さないようにモノトーンでいたいと思っていました。自分が育った環境が派手だったから。歌舞伎町のネオンサインのなかで育ったので、せめて自分は人の目を汚さないようにと思っていました。そこが原点です。ただし、そういった意味でも黒は傲慢です。

もうひとつ、僕自身が服をつくるうえで興味をもっているのは、カッティングやシルエット、動き、流れなんですね。それがおもしろくて服をつくっているので、ときどき色がいらなくなってしまう。色を忘れてしまう。色に対して怠慢になってきてもいます。黒に対して、念仏みたいなことはいろいろと言えるけれど、要するにめんどうくさいんです（笑）。

Q19　学生S（理工学部四年生）　お話を聞いて、神の降りる瞬間についてです。僕自身は、それを「なにによっても説明できないが、説得力をも凌駕する瞬間」ととらえていて、そういう瞬間は偶発的にやってくるのか、それともなにかを経てやってくるのか。そのあたりを耀司さんの個人的な体験をふまえてお答えください。

A　先ほど「贈り物」「ギフト」と言いました。そのときはそう思ったのですが、後でよく考えて、それは偶然ではなくて必然だったという最終的な結論に至りました。要するに、「それが降りてくるようにオレはがんばった。そこまで努力を重ねてきた。だから降りてきたんだ。だから必然だ」と今では思っています。

Q20　学生T（経済学部一年生）　「結局はファッションなんて自己満足だ」と言われることがよくあると思いますが、僕は個人的にはそれに対して疑問をもっています。山本さんのお考えはいかがですか？

A　すごく単純です。つくる側のパワーが上回っていれば、見た人が自己満足とは言えなくなります。意味がわかりますか？　つまり、真にパワフルなクリエーションは新しいマーケットをつくるんです。マーケットに合わせて服をつくるのではなくて、どこにもおいてないような、本当に新しいクリエーションこそが新しいマーケットをつくる。僕はそれを信じてやっています。

たとえば、会社内で言えば、営業部の連中は企画部のデザイナーを「自己満足だ」「マスターベーションだ」とすぐに言いますが、企画部は営業部を「センスがないのになにを言っているのか」と言い返す。そういう言い合いがあるのですが、自己満足かどうかを悩んでいるのは若い時期だけだと思います。自己満足を超えるパワーがあればいいんです。

さらにマーケットが見て、「えっ？」と思うようなタイミングや出会いも必要です。それはそのクリエーターがもっているカリスマ、惹きつける力ですね。その両方がいると思います。だからいくら頑張って、いくら才能があっても、成功しない人も多いんですよ。それはタイミングが悪いから。タイミングも才能のひとつだと思います。

Q21　学生U（理工学部修士一年生）　お嬢さん（山本里見）も有名なデザイナーですが、小さい頃からデザイナーになるために教育なさったのでしょうか？

A　すみません。彼女が小さいころに離婚しまして、その後十年間捨ててしまったんです。彼女のママ

は北九州の人なので北九州で育ったのですが、彼女は幼稚園から中学二年までヤンキーをやっていました。中学二年の後半に北九州では手に負えなくなって、僕がつれにいって、二人で暮らし始めたのが中三のときです。僕は仕事でパリに行かなくてはいけないので、そのときには彼女を連れて行って、高一の頃からパリコレクションを見せていました。これが彼女にとってはすごく勉強になったと思います。

でもたいへんでしたよ。男手ひとつで、中三から高一の色気づいた女を育てて居るんだから。きつかったです（笑）。